April 号外 2017
過去と現在を行き来しながら、未来を考える壁新聞
上町台地 今昔タイムズ
上町台地 今昔フォーラム
UEMACHIDAICHI†KONJAKU†TIMES vol.7 Document

企画・編集　U-CoRoプロジェクト・ワーキング ／ 発行　大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
問合せ先　tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）※U-CoRo＝ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
ホームページ　http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

U-CoRo Step 2 壁新聞プロジェクト 関連イベント

第7回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。

“しゅみじん”のまち・大阪レビュー

郷土玩具から広がる、「趣味人」ネットワークと近代・大阪の創造力

今回のフォーラムで着目したのは、近代化の波とともに近世・大坂の面影が失われていくなか盛り上がりを見せた郷土玩具の蒐集と、その担い手でもあった人魚洞（川崎巨泉）や乙三洞（森田乙三洞）など数々の「趣味人」たちのネットワーク、生き方、表現世界と都市文化。こうした“しゅみじん”のまち・大阪を、そこに連なる橋爪節也先生のまなざしでレビューしていただきました。当日は、講師と来場者が持ち寄ったコレクションや秘話なども紹介され、大阪のまちと文化のこれからのありようにも思いを馳せることとなりました。

■**日時**：2017年2月25日（土）14：00～16：30
■**場所**：大阪ガス実験集合住宅　NEXT21
2階ホール（大阪市天王寺区清水谷町6-16）
■**主催**：大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
■**プログラム**：コレクショントーク
講師　橋爪節也氏
大阪大学総合学術博物館教授（前館長）／大学院文学研究科兼任
質疑&持ち寄りトーク

▲壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」第7号（1面）

森田乙三洞

川崎巨泉

三好米吉

過去と現在を行き来しながら未来を考える「上町台地・今昔タイムズ*」第7号のテーマは「伝説の生玉人形とたどる ものづくりと文化の原風景」でした。

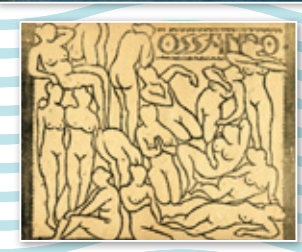
芸能とものづくりの申し子ともいえる、生國魂神社ゆかりの「生玉人形」を案内役に、今につながるものづくりの源流、産業と生活文化、人々の願いとともにあった、縁起物や玩具の数々をたどり、それらを記録した貴重な「おもちゃ絵」世界から浮かび上がってくる、ものづくりと文化の原風景の中に、創造的な都市の姿を展望しました。

*プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

Ⓐ岸本彩星童人「子寿里庫叢書」の第壱編『天王寺の蛸々眼鏡』（昭和12・1937年）

Ⓑ「子寿里庫叢書」第三編『ニウギニア其附近島嶼の土俗品』（昭和14・1939年）

Ⓔ三好米吉の長男・淳雄さんがモデル「柳屋第二世淳雄宝船」（中田一男画、昭和9・1934年）



Ⓒ乙三洞の裸婦群像の版画

Ⓓ山内心斧の木版画集『寿々 - Joujou -』（大正7・1918年）の台南の人形

Ⓕサーカス宝船「七偏人彩華洲宝船」乙三洞（昭和7・1932年）

Ⓖ乙三洞の太陽と骸骨の版画（大正時代）

〈講演ダイジェスト〉

「“しゅみじん”のまち・大阪レビュー」

郷土玩具から広がる、「趣味人」ネットワークと近代・大阪の想像力

橋爪節也氏

大阪大学総合学術博物館教授（前館長）／大学院文学研究科兼任

はしづめ・せつや

1958年大阪市生まれ。東京藝術大学助手、大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員などを経て現職。専門は日本近世・近代美術史。美術史にとどまらない観点から近世・近代大阪を探究。編著書に『モダン道頓堀探検』『モダン心斎橋コレクション』『大大阪イメージ』など。

※掲載資料のうち、提供先を明記したもの以外は、橋爪節也氏提供のものです。

なぜ「趣味人」「趣味家」に惹かれるか

なぜ私は大阪の「趣味人」「趣味家」と呼ばれる人たちに惹かれるのか。本日の会場ゆかりの上方落語の「東の旅」にかけて、その「発端」から参りましょう（笑）。

平成17（2005）年に「モダニズム心斎橋」という近代大阪に関する展覧会を行った（図❶❷）。その際、図録代わりとして、雑誌『大阪人』2月号でも「モダニズム心斎橋」を特集（図❸）。このあと、大阪ガス エネルギー・文化研究所の季刊誌『CEL』76号に、「街の記憶へのタイムトラベル―〈モダニズム心斎橋展〉とは何だったか」という論考を寄せた。このときに気がついたのが、戦前における大阪の趣味人・趣味家と呼ばれる人たちの存在の大きさだった。同じ時期、私は『モダン心斎橋コレクション』という本も編集しているが、やはり大阪心斎橋の美術を語る際には、どうしても、趣味人・趣味家と言われる人たちが外せないテーマとして出てくるわけです。

名前を挙げると、高橋好劇、木村旦水、川崎巨泉、三宅吉之助、梅谷紫翠…。こうした大阪の趣味人たちの集合写真があるが、全員が変な扮装をして写されている（図❹）。今で言うコスプレ（笑）。高橋好劇は演劇がすごく好きな人。木村旦水は「だるまや書店」の店主。川崎巨泉は郷土玩具を研究し、おもちゃ絵を描いた人。梅谷紫翠は、歯医者だが、自分の苗字にちなみ、天神さんの人形を集めた。彼らは同好の士として集まり、「娯美会」という会をやっていた。たとえ他の人にはゴミに見えようとも、自分たちはそれを集めて楽しんでいるという集まり。

近代大阪に関する展覧会をしようとすると、こういう人たちの資料がたくさん出てくる。しかしそれは、オーソドックスな美術史の価値観では対応しきれないものばかり。美術品と言ってよいのかどうかも判断に困る。とても日常的なもので、例えば、絵はがきとか宝船の絵とかがたくさんある。しかし、それらが都市における広い意味での美術を語る上で、私にはどうしても不可欠なものに思われた。

近代的芸術観では、佐伯祐三などの天才画家のような個性的存在が中心にある。その天才が一個のテーマをもって自分を厳しく追求していくという芸術観。しかし、趣味人の世界には、従来の芸術観とはまったく異なるものがある。しかもそれらは、かつての大阪の人たちの生活の中に深く浸透していたと言えるものだ。

これはオーソドックスな従来の美術史よりも、もっと大衆的な図像を研究する「大正イマジュリィ※学会」などの対象となるジャンルだと言えるかもしれない。

※「イマジュリィ」はイメージ図像を指すフランス語で、挿絵・ポスター・絵はがき・広告・漫画・写真など大衆的な図像の総称。その文化的豊かさや面白さが近年認識されつつある。

鍵になる「あほかいな」の精神

キーワードの第一は「稚気」、一言で言うと「あほかいな」という精神（笑）。または童のこころ、「童心」。趣味人とは、そういうものを蘇らせようという意識をもった人たちだと言えるのではないか。なかには、結構な資産家や社会的地位が高い人も含まれるのに、なぜこんな扮装で集まり写真におさまっているのか、ほんとうに「あほかいな」と（笑）。

次のキーワードは、「職業を離れた連帯感」。趣味人には、歯医者や本屋、会社経営者もいる。そんな人たちが一個の趣味で付き合っているのが重要なこと。これは大阪的だと言えそうだが、もう少し考えないといけないところもある。こういう人たちは東京にもいたし、全国的にいた。それでも、大阪の場合には、たぶん大阪らしい特色がより色濃くあっただろうと思われる。

もう一つのキーワードは、「収集への情熱」。その情熱の源泉は何かというと、「自分独自の世界秩序を構築することが快感」なのではないか。梅谷紫翠は、名前から梅と言えば天神さんだということで、天神さんに関する人形を集めた。コレクションとはそういうもので、自分が好きで価値を感じるものを集める。ここが足りない、この辺があればもっと良くなるなどと考えながらさらに集める。

もっと進んで言うと、「童心」というのは、近代化が進むなかで失われていく、なんらかの「純粋なものに帰りたい」というような思いであるだろう。戦前のこの頃は、民俗学的な関心も社会に広がっていた時代。文明と未開とも言うが、当時の言葉では、野蛮なもののなかに純粋性があるという思いがあったかも知れない。趣味人のなかにはお金持ちもいて、もっと高額の美術品を買うこともできるのに、なぜ人形集めなどに走るのか。それを解く鍵は、この純粋性の希求にあるのかも知れない。

「大大阪」の誕生の一方で高まりを見せる郷土研究熱

もう一つのファクターとして、大正14（1925）年4月1日に「大大阪」が誕生したことも見逃せない。この年、大阪市は第2次市域拡張で、面積・人口とも、わずかながら東京市を抜き、日本第一の都市となった。当時は、ニューヨーク、ロンドン、ベルリン、シカゴ、パリに次ぐ世界第6位の都市と言われたが、大正末～昭和初期には、關一市長を中心に大阪では新しい都市計画が進められ、御堂筋が拡張され、日本初の公営地下鉄がつくられた。

しかし、“大大阪”の誕生は未来に向けてだけではなく、同時に過去に対するまなざしをも生んだ。この時代、郷土研究が全国でも非常に盛んになるのだが、大阪でも集中して郷土研究の雑誌が出てくる（図❺）。木村旦水「だるまや書店」の『難波津』（大正13・1924年創刊）とか、上田長太郎の『大阪叢書』（昭和2～4・1927～29年）。さらに、木谷蓬吟の『郷土趣味 大阪人』（昭和4・1929年）。ここ

❹大阪の趣味人たちの集まり「娯美会」の「奉祝変装余興」での写真。昭和3（1928）年12月19日、昭和天皇の御大典を祝し天王寺公園内の小宝に集合した際に撮影（写真は『大阪人』2005年2月号より）

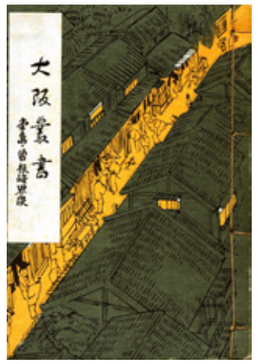
❶「大大阪」誕生80周年記念「モダニズム心斎橋ー近代大阪／美術とシティライフー」。この展覧会は、平成17（2005）年1月15日～3月21日に大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室にて開催された

❷「モダニズム心斎橋」展では、往事の大阪人のモダンな暮らしぶりをうかがわせる展示品が並んだ。その一画には、挿絵や絵はがき、しおりなど、趣味人の収集物などの展示ケースも設けられた

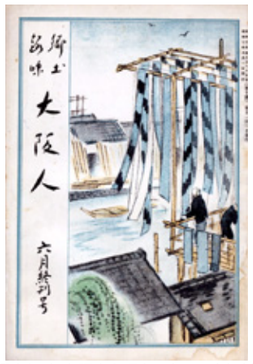
❸雑誌「大阪人」（2005年2月号）「モダニズム心斎橋」を特集

❺大正末から昭和初期にかけ大阪では郷土研究が盛んになり、多くの雑誌が創刊された

『難波津』大正13（1924）年創刊



『大阪叢書』昭和2（1927）年創刊



『郷土趣味 大阪人』昭和4（1929）年創刊

郷土研究『上方』昭和6（1931）年創刊

❻ 南木芳太郎を描いた絵はがき「仁王門二立テル南木先生」

で「趣味」という言葉が使われている。こうした動きの決定版と言えるのが、南木（なんき）芳太郎が出した郷土研究『上方』(昭和6・1931年創刊)だろう。

『難波津』創刊号はこう主張する。

「新しい大大阪の建設は漸次に進んでゆくに反して月日の立つと共に我大阪の遺跡口碑など所謂浪華の面影は漸次に亡びゆきます。その懐かしい難波情調を、せめては今の中に書きとゞめて後世に残し置きたい」

大阪が大大阪になったときに、近代化が進んでいくにつれて、古き大阪の良きものがなくなっていく。それは実に残念なことだと言う。

『上方』創刊号でも、南木がこう語る。

「亡びゆく名所史蹟、廃れゆく風俗行事、敗残せる上方芸術、その一歩々々薄れ行く影を眺めて、私は常に愛借の情に堪へません。滅びゆくものは時の勢として如何とも致方ないが、せめて保存に努めたい、そして記録に留めて置きたい、これが私の念願でした」

こうした言葉を集めてみると、大大阪が成立して、社会やまちの風景も著しく変貌を遂げ、近代化していくなかで、伝統文化などに関心を寄せる知識人には大きな不安があったことに気づかされる。このままでは、大阪の文化は滅んでしまうのではないかという、強い危機感があって、逆にこういう趣味的なものや大阪の古き伝統に帰っていこうとする動きがあった。そのなかで彼らは「純粋性」を求めたのではないか。こうした動きは全国的にあっただろうが、大阪の独自性をどこに見ていくのかは、今後さらに考えていくべきことと思われる。

自分たちのことで言うと、先人たちに倣って、数年前から『新菜箸本撰（しんさいばしほんえらみ）』という同人誌を心斎橋の中尾書店から出している（図❼）。そのテーマは「趣味性」で、南木芳太郎の『上方』のあり方を理想としている。南木は、『上方』は学術性を担保しながらも趣味性を失わないようにしたいと、はっきり述べている。例えば、『上方』の表紙には多色摺りの木版画が1冊1冊に貼ってあるなど、本格的に凝っていながらも、どこか遊びの心がある。

趣味人というのは、職業をちゃんと持ちながら、趣味に走る人たちのこと。さらに言うと、昔の大阪、特に道頓堀から心斎橋あたりには、この趣味人たちに趣味的なものを提供する個性的な店とか本屋の店主や画家たちがいて、彼らを中心に、多くの人が集まってきた。

そういう人たちを順に紹介していこう。

大阪の趣味人・趣味家群像

人魚洞―川崎巨泉（1877～1942）

❽ 川崎巨泉

最初に出てくるのが川崎巨泉。彼は堺生まれの画家。人魚洞・芳斎・碧水居という号を使う。人魚洞の名は、自分が好きな「人形」と「人魚」をかけている。明治25（1892）年に、堺在住の中井芳瀧に学び、後に養子となった。系譜で言うと、歌川豊国－歌川国芳－歌川芳梅－中井芳瀧－川崎巨泉となり、実は江戸の歌川派の流れを汲んでいる。

師匠の芳瀧は、安政年間（1854～60）に出された「浪花百景」でたくさんの図を描いた人。「天満天神地車宮入」とか「高津」、「佐奈田山三光宮」、心斎橋大丸の「松屋呉服店」、「四つ橋」など31図（図❾）。この師匠に巨泉は絵を習い、明治36・37（1903・04）年頃より郷土玩具を描くようになった。

そののち、巨泉は大阪の鰻谷に居を移す。昭和2（1927）年、家が御堂筋建設に引っかかり西成に移転することになるが、その家があったのが、現在の心斎橋のホテル日航大阪の向かい側で、以前のそごう心斎橋本店（現大丸心斎橋店・北館）の北西斜め前あたり。今は道路の中に入ってしまっているが、まさに心斎橋に住んでいたと言ってよいような場所にあった。

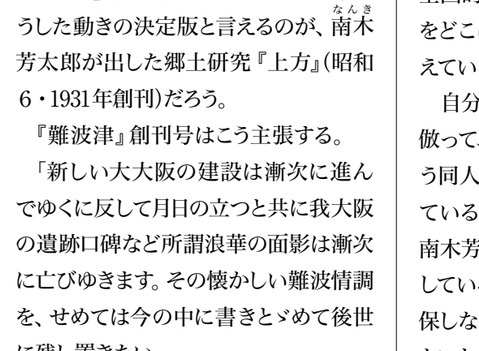
それ以前の大正13（1924）年に、巨泉は『巨泉漫筆おもちゃ箱』を出している（図❿）。あとがきには「大阪鰻谷人魚洞にて」とある。おもちゃの絵が1枚ずつ摺ってあって、それが箱に入っている。

巨泉は、おもちゃは「貴き立派な一つの藝術品」だと言う。趣味人たちのなかには、海外のものを集める人もいたが、彼は日本の玩具を最も尊んだ。

同人誌『人魚』は大正10（1921）年に1号を出し、昭和2（1927）年6月の6号までは鰻谷の発行で、同年8月からの住所は次の移転先の西成区有楽町（図⓫）。表紙をめくると、例えば木版画の生玉人形が出ていたり、おもちゃ絵についての解説などもある。また、幕末・明治頃に出た「小摺りのおもちゃ繪」を切って貼り付けている頁もあって、なかなかの凝りよう。人魚堂の蔵書票にもいろいろある。洋画家に描いてもらったものは、ちょっとモダンな感じ。こうしたものも1枚1枚貼り付けてある（図⓬）。

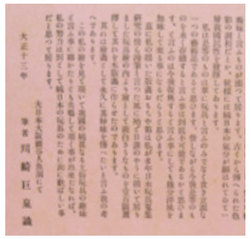
次に、『おもちゃ畫譜』（全10巻 昭和7～10・1932～35年）を出す。面白い本で、狐やカエルの絵などのほか、筒状にして、それを回すと絵が動いて見えるという、動画の原型みたいなものもある（図⓭）。それらは実に膨大な量だった。

川崎巨泉については、大阪府立中之島図書館が寄贈を受け、玩具帖全52号・巨泉玩具帖1巻1号～6巻10号までの全112冊の玩具絵画を所蔵している。それらはデジタルデータ化され、データベースは現在ウエブ上で公開されている。



❼ 橋爪節也氏らの同人誌『新菜箸本撰』では、2007年の第３号と第４号で「乙三洞」を特集

❾ 川崎巨泉の師、芳瀧が「浪花百景」(安政年間1854～1860年)で描いた「天満天神地車宮入」、「高津」、「松屋呉服店」の図（大阪市立図書館デジタルアーカイブより）



❿ 大正13（1924）年に巨泉が出した『巨泉漫筆おもちゃ箱』(個人蔵)。1枚ずつ摺られたおもちゃ絵が箱に入っている。あとがきに「大日本大阪鰻谷人魚洞にて」の記載

⓬『人魚』のなかでは、洋画家がデザインした人魚洞の蔵書票や小摺りのおもちゃ絵の紹介なども

⓫ 巨泉が出していた雑誌『人魚』第2号（大正10・1921年）の表紙。中の頁では、生玉人形などが絵とともに紹介されている。

⓭ 巨泉の『おもちゃ畫譜』(個人蔵、全10巻 昭和7～10・1932～1935年)。筒にして回すと動いて見える絵なども紹介

生玉人形は、とらや饅頭、四ツ橋きせると並ぶ大坂の名産品（『五畿内産物図会 摂津の部』文化10・1813年、国立国会図書館デジタルコレクションより）

大阪の名玩「生玉人形」の始まりは？

川崎巨泉の「おもちゃ絵」にも描かれ、大阪の趣味人たちを魅了した伝説の名玩「生玉人形」。

その起源は、千日前・法善寺境内で旅の役者が内職でつくり始めた操り人形が原型だとも伝えられるが、実はその誕生の時代や経緯はいまだに定かなものではない。

上方の芸能・文化に造詣が深い肥田晧三先生は、元禄頃（1688～1704年）に生國魂神社門前で活躍した上方落語の開祖・米沢彦八が得意とした物真似芸の姿との類似性を指摘し、「生玉土産の生玉人形は、この米沢彦八の大名姿を人形にしたもの」だろうと推測する。したがってこの人形は「元禄時代から生玉で作られていた」とも考えられるが、少なくとも文化10年（1813）の『五畿内産物図会』に生玉人形の図が出ていることから、その誕生は19世紀初め以前に遡るのは確実だと論じている※。

※「大阪の生玉人形」(『人形玩具研究』第11号 、平成12年9月1日)

「上町台地 今昔タイムズ」第7号掲載の「生玉人形」は、実物資料やおもちゃ絵などを参考にして、富田林市の佐々木義昂さんが再現したもの（写真は三番叟、町人、娘の人形）。

⑭ 山内心斧が大正7(1918)年に出した、世界の玩具の木版画集『寿々 - Joujou -』(「ジュジュ」は仏語でおもちゃのこと)

吾八ー山内神斧(1886～1966)

山内神斧(しんぷ)は、明治19(1886)年、大阪生まれで名は金三郎。画家を志して上京し東京美術学校日本画専科を卒業。明治44(1911)年に大阪に戻り、新町に美術店「吾八」を開店している。大正2(1913)年に平野町に移動し、そこで、大津絵、泥絵、ガラス絵や玩具・人形類、民芸品など、いかにも趣味人が喜びそうなものを扱っていた。

のち、大正8(1919)年に再び上京。大正11(1922)年に主婦之友社に入社する。そこで、昭和11年(1936)まで勤めるが、小林一三に見込まれたらしく、昭和12(1937)年、今度は阪急百貨店に美術部嘱託として入社。そこで雑誌『阪急美術』を創刊する(46号から『汎究美術』と改称)。昭和16(1941)年には阪急百貨店美術部内に「梅田書房」を設立。こちらは古本趣味の本屋だった。

彼の活動で一番有名なのは、大正7(1918)年に『寿々 - Joujou -』という木版画集を刊行したこと(図⑭、1面Ⓓ)。これは、限定百部の世界の玩具を集めた木版多色摺りの和綴本。「Joujou(ジュジュ)」というのは、フランス語でおもちゃのことで、南洋の影絵人形、ビルマの操り玩具、支那の張り子、バルビゾンの鳥笛、パリ謝肉祭の仮面、ロシア・東欧の人形などが掲載されている。これは版木が残っていて、今は芸艸堂からの復刻版がある。彼は、世にはあまり知られていないが、その重要性については肥田晧三先生も常々高く評価されている。

柳屋ー三好米吉(1881～1943)

⑮ 三好米吉

三好米吉は、宮武外骨の「滑稽新聞社」にいた人。「滑稽新聞」は明治34(1901)年に大阪で創刊され、社会の腐敗を痛烈にしかも滑稽味を加えて批判した新聞として知られている(図⑯)。同社があったのは現在の江戸堀二丁目。その昔は薩摩藩邸があったあたりで、大阪市が「宮武外骨ゆかりの地」の顕彰碑を建てている。

滑稽新聞のモットーは「威武に屈せず富貴に淫せず、ユスリもやらずハッタリもせず、天下独特の肝癪(かんしゃく)を経(たてい)とし色気を緯(よこいと)とす。過激にして愛嬌あり」というもの。

滑稽新聞は、公権力に対しても反骨の姿勢を貫いたが、明治41(1908)年10月、ついに当局は滑稽新聞に発行禁止命令を出す。しかし、それが判明した段階で、宮武外骨は173号を以て「自殺号」として滑稽新聞の廃刊を決定。しかも、その翌月には「大阪滑稽新聞」を創刊して事実上の後継誌とした。

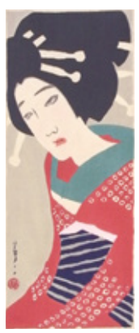
三好米吉は、同紙の第29号から「自殺号」まで、その発行人兼編集人を務めていたが、これは万一の場合でも外骨に累が及ぶのを防ぎ、新聞の発行を続けるための策だったとも言われている。

三好米吉は、そうした反骨精神を受け継ぎつつ、明治43(1910)年、平野町に趣味の店を開く。それが「柳屋書店」。そののち、大正10(1921)年に、店は八幡筋畳屋町に移転する(図⑰)。その場所は、今の心斎橋の不二家の角を一本東に入ったところの南東角。

ここでは、人気作家の竹久夢二の木版画を柳屋版として出し販売する。夢二は、東京では「港屋」から出していたが、港屋が閉めたあとに、その権利を譲り受けた。木版画だけでなく、夢二の団扇やポチ袋なども販売した(図⑱⑲)。

⑯ 三好米吉が第29号から発行人兼編集人を務めていた『滑稽新聞』(個人蔵)

⑰ 八幡筋に面した柳屋の店先



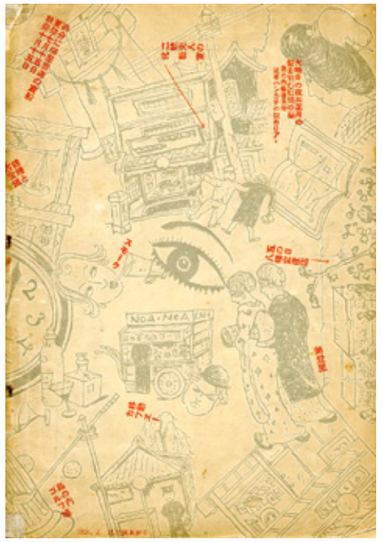
⑱ 竹久夢二の版画「小春」「治兵衛」(柳屋版)(『大阪人』2005年2月号より)

⑲ 竹久夢二筆の団扇(『モダン心斎橋コレクション』より)

㉑『柳屋』第42号「考現の巻」の表紙は、森田乙三洞が描く八幡筋界隈のイラスト

⑳ 柳屋の包装紙は富本憲吉の図案

㉒ 八幡筋玉屋町にあった杉本梁江堂



「道頓堀を真中にして、三人の愉快な知人が、私には有る。一人は柳屋主人三好米吉君、一人はビードロ博士で通る三隅君、もう一人は楽天地裏の本屋のおつさん。此三人は、丁度三角関係のやうに、盛り場を取囲んで住つて居る人達で、(中略) 此三人は、私の大阪に於ける最も好な人、親しい人、悪友でもある」

当時、柳屋主人三好米吉は大阪の名物男。また、「楽天地裏の本屋のおつさん」は後述する森田乙三洞(おっさんどう)のこと。

柳屋の包装紙は富本憲吉の図案で、柳の木に「大阪」「柳屋」の文字、とてもしゃれている(図⑳)。こういうものを美術史の世界でどう扱うかが実に難しい。

柳屋は通信販売のために、目録『柳屋』を出している。その第42号「考現の巻」では、自分が住んでいる八幡筋界隈のイラストを森田乙三洞に描かせているが(図㉑)、そのなかには、当時、柳屋の近くにあった趣味家系の本屋さんが2軒描かれている。一つは「杉本梁江堂(りょうこうどう)」(図㉒)。今は阪急古書のまちと天神橋筋に店を出している、芸能関係に強い本屋。もう一軒は「荒木伊兵衛書店」で、ここも『古本屋』(昭和2・1927年創刊)という趣味性の高い商品目録を出していた(図㉓)。店の前には、江戸時代の図譜などに出てくるような、昔の本屋の看板がある。当時の写真を見ると、洋書がたくさんあり、浮世絵も置いている。

荒木伊兵衛書店は八幡筋の心斎橋と御堂筋の間。杉本梁江堂は柳屋から2本東の玉屋町。ちなみに、木村旦水の「だるまや書店」は一時、八幡筋の柳屋の何軒か東にあったのが、のちに今のアメリカ村に移転した。いずれにしろ、このあたりは、個性的な古本屋とか骨董屋とかが集まっていた地域。趣味人たちがけっこう集まって来たらしい。

柳屋の一本北には、「尾上蒐文洞(しゅうぶんどう)」という趣味性の高い店もあった。俳人の山口誓子がよく通っていたという。彼は真田山の近くに住んでいたが、勤め先の北浜五丁目の住友本店から心斎橋に出てくると、周防町をまっすぐ歩いて帰る途中に必ずこの店に立ち寄ったと、随想集『宰相山町』(昭和15・1940年)に書いている。

三好米吉の柳屋では、宝船の絵も出していた。この話はあとでするが、2月3日の節分にその交換会をする。そのために、とても趣向を凝らす。例えば、柳屋の宝船のひとつが昭和10(1935)年の「ホテル宝船」(図㉔)。ホテルのベッドを宝船に見立てて描いているが、スタンプが2つ押してある。島ノ内ホテルと新大阪ホテル(現リーガロイヤルホテル)のもので、そこにわざわざ押しに行っている。そのほかに、米吉は息子の淳雄さんをテーマにした宝船もつくっている(1面Ⓑ)。もう一つ、丸い絵の宝船もあるが、これはお

㉓ 荒木伊兵衛書店が出していた目録『古本屋』に掲載された店頭と看板の写真

㉔ ホテルの寝台を帆船に見立てた、柳屋の宝船(昭和10・1935年)

㉕ 魚眼レンズで覗いたように描かれた宝船の絵

㉖ 裏と表で天地が逆になっている『柳屋』の表紙

㉘ 柳屋を寺院に見立てた「柳寺之印」

㉗『柳屋』の表紙には、北野恒富、藤田嗣治、普門暁の作品も

そらく魚眼レンズをイメージしているだろう（図㉕）。魚眼レンズで撮影した三好本人の写真もあるが、場所は中之島の朝日会館屋上（図⑮）。そこに何か新しい時代の雰囲気を感じていたようだ。

裏と表の表紙が上下逆になっている目録もある（図㉖）。両側から見ていくと、真ん中の頁では文字の組みも天地が逆。いちびりまくりで、とても凝っている。また、さまざまな人が表紙の絵を描いている。日本画家の北野恒富（つねとみ）や洋画家の藤田嗣治（つぐはる）、未来派の普門暁（ぎょう）という作家が描いたものもある（図㉗）。

それから「柳寺之印」（図㉘）。これも趣味人たちの遊びだが、「道楽宗」というのが当時、彼らの間で流行っていた。趣味人が自分をお寺に見立てる。それが集まって、「道楽宗三十三ヶ所巡礼」となる（笑）。柳屋は三十一番。

趣味人であり反骨の人だった三好米吉は、昭和18（1943）年に没す。その翌年、畳屋町の柳屋の建物を引き継ぎそこに入居したのは、次の森田乙三洞だった。

森田乙三洞（1895～1959）

㉙ 森田乙三洞、楽天地南横の店の頃

森田乙三洞、本名は森田政信。皆におっさんと呼ばれたことから乙三洞と名乗ったという。

実は、「ほんや・乙三洞」という看板が、20年くらい前まで鰻谷、長堀橋の近くにあった（図㉚）。私は昔から気になっていたが、心斎橋の中尾書店のお父さんに尋ねたら、「森田乙三洞」の店であると教えられた。また娘さんはご健在ということで、お会いしてお話をうかがうことができた。

森田は、明治28（1895）年に奈良県に生まれている。明治末には、大阪市西区本田三番町に住んでいた。裏に「イジン屋敷にて」と書かれた写真があるが、旧居留地の付近に住んでいたらしい。

大正3（1914）年に19歳で、千日前の楽天地の南横に店を開いた。納札などには「大坂楽天地南横」と記載されている（図㉜）。実際の場所は、今の自由軒の並びあたりか（図㉞）。続けるうちに次第に知る人ぞ知る店になっていき、10年後の大正13（1924）年には、画家の岸田劉生が店に訪れたことは『劉生日記』に記されている。

版画などに残されている文字のレタリングのセンスも当時流行の感じ。川崎巨泉は日本のおもちゃを尊んだが、森田乙三洞になると、雑多な近代的なものも混ざってくる。版画の「OSSANDO」の文字もそう（図㉝）。卯年の節分のはがきには、悪魔のような、たぶんビリケンが登場する（図⑦）。自分でつくった小物入れには、お化けの絵柄を裏表に付けたり、マチスの《ダンス》を写したものもある。こういったところが、やはり趣味人。

宝船の絵もたくさん残している。「モダン宝船 NO1930」と書いてあるのは、昭和5（1930）年のものか（図㊱）。道頓堀に船が出て、その上で七福神がダンスを踊っている絵もあるが、音楽はおそらくジャズ。こうした宝船の絵は2月3日の節分のときに、仲間同士で交換し収集した。サーカスのような宝船「七偏人彩華洲」という絵もある（1面Ⓕ）。昭和7（1932）年には、絵はがきの交換会「宝葉会」にも参加している。

昭和6（1931）年、36歳のときに、店は楽天地南横から移動する。場所は難波の「溝之側（みぞのかわ）」で、現在の中央区難波三丁目六番地。御堂筋がまだ拡幅されていない頃で、元の店の前の道を御堂筋の方向にずっと行った先の北側だった（図㉞）。前年には、楽天地が閉館しているが、移転にはそれも関係しているかも知れない。この年に、森田は『柳屋』「考現の巻」の表紙を描いている。

そののちの店の様子を伝える貴重な絵が残されている（図㊳）。戦争中、森田の娘さんが滋賀県に疎開していたとき、空襲に備えた建物疎開のなかで、自分たちの家はまだ残っていることを絵にして伝えたもの。「植木の有る家が私の内」と書いてある。

隣に「十二段家」とあるが、ここは、現在、京都祇園で食べ物屋をやっている十二段家。戦前は大阪の難波で本屋さんをやっていた。当時の雑誌『ショップガイド』の広告には、「十二段家書房」と「エミヤ書店」が並んで出ている。この2つの書店は兄弟でやっていたもので、エミヤ書店が新刊書、十二段家書房は「知識人のオアシス」を称して「高級図書」を扱っていた。

昭和12（1937）年、彼は42歳のときに「子寿里庫叢書（ねずりこそうしょ） 第壱編」（『天王寺の蛸々眼鏡（たこたこめがね）』）を発行している（1面Ⓐ、図㊵）。これは次に紹介する岸本彩星童人（さいせいどうじん）という人が乙三洞につくらせたもので、内容も濃く、凝りに凝った本。

昭和19（1944）年に、難波・高島屋の前付近が建物疎開で取り壊されることになると、前年に亡くなった三好米吉の柳屋の建物に入居した。しかしこの家も、昭和20（1945）年、娘さんの精華小学校の卒業式前日、3月14日に空襲で焼けてしまう。

その後は、安堂寺橋通の御堂筋のところで店をやり、昭和26（1951）年に鰻谷仲之町に移った。乙三洞は、昭和34（1959）年に64歳で亡くなったが、世界の民芸品やそれを描いた絵などもスケッチブックに残されている（図㊴）。

㉟『柳屋』カフェーの巻」に森田が描いたイラスト

岸本彩星童人「子寿里庫叢書」

㊵「子寿里庫叢書」第壱編の『天王寺の蛸々眼鏡』（昭和12・1937年）

森田乙三洞に「子寿里庫叢書」をつくらせたのが、岸本彩星童人。本名は岸本五兵衛といい、船会社の岸本汽船を経営する実業家で、会社は西区西長堀通四丁目（今の北堀江）にあった。彼は民俗資料の大コレクターで、乙三洞の顧客。当時、高級車を御堂筋に横付けし、すらっとしたダンディなおじさんが乙三洞に入ってくると、それが彩星童人だったという。

「子寿里庫叢書」は全部で4冊出ている。その第壱編が昭和12（1937）年の『天王寺の蛸々眼鏡』。表紙は「蛸々眼鏡」のレンズの絵で、裏表紙にあるのは「ねずりこ」の絵（図㊵）。ねずりことは、おしゃぶりのことで、それを自分の書庫の名にした。

「蛸々眼鏡」は昔、四天王寺で演じられていた大道芸で、昔の大阪人は、なぜかこの「蛸々眼鏡」が大好きだった。『上方』や『郷土趣味 大阪人』の表紙にも出てくるし（図㊶）、日本画家の生田花朝が描いた絵もある。洋画家の小出楢重も随筆「春の彼岸とたこめがね」でこう記す。

㉚ 乙三洞の手彫りの看板（『新菜箸本撰 第四号』より）

㉛ 森田乙三洞、楽天地南横の店先にて

㉜ 納札には「オツサン堂」の表記と「大坂楽天地南横」の文字（『新菜箸本撰 第四号』より）

㉝「MORITA OSSANDO OSAKA NANCHI 美術書籍店」と記された版画（『新菜箸本撰 第参号』より）

㉞ 楽天地南横の乙三洞は自由軒のあたりか。昭和6（1931）年には溝之側に移転（背景図は『大阪春秋』128号付録「道頓堀ニュース」昭和4・1929年の地図）

㊱ 乙三洞の「モダン宝船 NO1930」（昭和5・1930年）

㊲ 乙三洞の「宝船」（昭和6・1931年）

㊳ 森田が自分の娘の疎開先に送った絵は、難波駅前付近の建物疎開の状況を伝えるもの。中央の「植木が有る家が私の内」が乙三洞で、その右に十二段家書房（『新菜箸本撰 第四号』より）

㊴ 乙三洞の画帳に残された国内外のおもちゃの絵（『新菜箸本撰 第四号』より）

41「蛸々眼鏡」を描いた雑誌の表紙

「（前略）その多くの見世物の中で、特に私の興味を捉とらえたものは蛸めがねという馬鹿気た奴だった。（中略）一人の男が泥絵具と金紙で作った張ぼての蛸を頭から被るのだ、その相棒の男は、大刀を振翳（ふりかざ）しつつ、これも張ぼての金紙づくりの鎧を着用に及んで張ぼての馬を腰へぶら下げてヤアヤアといいながら蛸を追い廻すのである」

この間に、今一人の男がきりこのレンズの眼鏡を見物人に貸し付けて回る。

「この眼鏡を借りて、蛸退治を覗く時は即ち光は分解して虹となり、無数の蛸は無数の大将に追廻されるのである。蛸と大将と色彩の大洪水である。未来派と活動写真が合同した訳だから面白くて堪まらないのだ。私はこの近代的な興行に共鳴してなかなか動かず父を手古摺（てこず）らせたものである。（後略）」

レンズを通して「無数の蛸」が見える。ちょうど『天王寺の蛸々眼鏡』の表紙絵のよう。この絵を描いたのは彩星童人で、木版に仕上げたのは森田乙三洞。

彩星童人が昭和12（1937）年5月に神戸住吉の別邸で園遊会をやったときの目録があるが、その「園遊會記」によると展示や余興もすべて「蛸々眼鏡」特集になっている。

第一席、庭園では「蛸々踊り」が演じられた。第二席の茶の湯では、掛け軸が蛸々で、これは菅楯彦（すがたてひこ）が描いたもの。洋館一階客間、陳列箱には蛸の玩具類。記念品は「子寿里庫叢書」第壱編と彩星童人が考案した「蛸々毛人形」。蛸々の人形もあり、ここまでするかというくらい収集している。これが趣味人。

昭和13（1938）年、「子寿里庫叢書」の第貳編として、海外の虎のおもちゃを集めた『異國虎玩具圖会』を出す。第三編は昭和14（1939）年の『ニウギニア其附近島嶼の土俗品』（1面B）。第四編は昭和15（1940）年の『貯金箱』（図42）。第三編と第四編は「吾八」が発行しているが、基本的には乙三洞が関係している。

第三編『ニウギニア其附近島嶼の土俗品』は写真が主体でほかのものとは趣がちょっと違う。岸本には民俗学的な興味があったのだと思う。仕事柄、海外の情報が入りやすかったこともあり、人形類を集めるにしても、「童心」だけではなく、もう少し広い観点から捉えていたように思われる。

第四編『貯金箱』はなかなかの名作。世界各地の貯金箱を紹介している。表紙絵が椅子に座った西洋紳士の貯金箱（図42）。岸本さんはきっと実物を所有していたと思う。

頁をめくると、ドイツの貯金箱の木版画、口からコインを入れるもの。隣はロシアの貯金箱。オランダの貯金箱では、お金を入れると窓が開いて鳩が出て来る（図43）。これはオランダ向けにつくったもの。表には水道の蛇口からお金が出てくる絵があり、裏には金袋を重そうに持ち込むところが描かれている。横には老人が平和を楽しむ様子の絵。これについては、「現実の情勢から見ると随分皮肉を通り越して只気の毒な感が致します」と当時の国際情勢をうかがわせる記述がされている。次の米国の貯金箱は、お金と一緒に人を鯨の口に放り込もうとするもの。ウイリアム・テル風の、銃で子どもの頭上の果実を撃つ貯金箱もある。

圧巻は、「ポンチ・エンド・ジュディー貯金箱」。主人公ポンチは、「我が子を絞殺し、次に妻を打殺し、警官をブンナグル」ようなことを滑稽に行う人物で英国の古い道化話のひとつ。この話にちなんでロンドンで発行された有名な滑稽雑

42「子寿里庫叢書」第四編の『貯金箱』（昭和15・1940年）

43 世界の貯金箱が絵入りで紹介されている

44 乙三洞について彩星童人が書いた一文。新聞を読んでいるのが乙三洞

誌があり、日本のポンチ絵もこれを真似て流行したものだという。この貯金箱は、お金を入れると犬が骸骨になるらしい。

この号には、森田乙三洞について彩星童人が書いた一文もある（図44）。

「（前略）店先は商品に占領されて足の踏み込む所さへ無い位で、（中略）常連は表を通るとガラス越しに奥の方を覗て見、光り物が見付かると初めて乙三今日は、と入ってゆくと云った調子の甚だ失禮な事をして居る」

乙三洞の頭は禿げているから、常連は前を通って、光っているものがあると、「こんにちは」と入っていったという（笑）。

趣味人が集った「宝船交換会」

大阪の趣味人たちは、自分がつくった宝船の絵を交換したが、それ以前、江戸時代にも同じような会が盛んに行われた。それが、絵暦（えごよみ）の交換会。

太陰暦では、大の月・小の月が毎年変わるので、月の大小を絵で表した絵暦が使われた。それが次第に多色摺りや多彩なデザインを競うようになっていく。そのときに、旗本の大久保甚四郎（俳名 巨川）と阿部八之進（俳名 莎鶏）、薬種商の小松屋三右衛門（俳名 百亀）らが、お金に糸目をつけずに多色摺りの技術を開発させた。そこから出てきたのが、錦絵で知られる鈴木春信。それ以前は、色数は少なかったが、ここから我々が浮世絵と言ってイメージする、多色摺り木版画の錦絵が誕生する。

大切なことは、まず互いに競い合うということ。加えて、それを自分たちでお金を使ってやるということだろう。そうしてこそ何か新しいものが生まれてくる。

同じように、大阪の趣味人たちは、大いに趣向を凝らした宝船の交換会を行った。昭和7（1932）年の「浪華宝船会」の資料（乙三洞発行）を見ると、表面は「浪華寶船會 寶船授与所畧図」で、授与所の場所がポイントされた地図になっている（図45）。番号があるところに行くと宝船の交換ができる。

図の内側を見ると、幹事としては、木村旦水とか林家染丸、川崎巨泉、梅谷紫翠とかの名が並ぶ。頒布所のリストがあって、この資料の持ち主が実際に行ったところに判が押してある（図46）。面白いのは「同所出張」で、自宅が名古屋の濱島さんは自分の宝船を木村旦水のところに託している。三好米吉、杉本要、三宅吉之助ら、趣味人たちが皆この会に入っていて、同年の頒布者は111人、頒布所は74カ所もあった。リストに「上方郷土研究会」とあるのは南木芳太郎のところ。浮世絵師、長谷川小信の名もある。

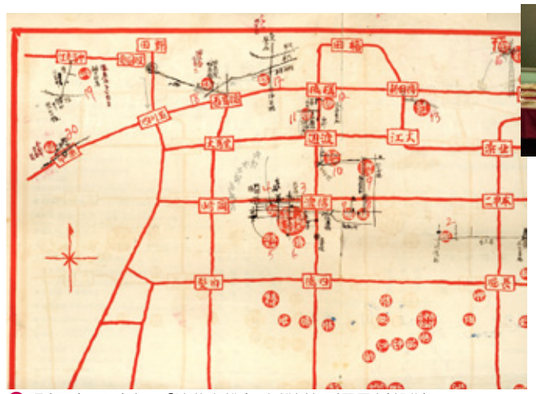
この宝船を絵はがきにして交換したのが「宝葉会」。幹事は浪花善三の「浪花贅六庵（ぜいろくあん）」で、はじめは道頓堀戎橋東のナニワ子供洋品店だったのが、趣味の店に変わっていったもの。くいだおれ付近にあったと思う。絵はがき交換会を始めたのは昭和7（1932）年らしい。自分の絵はがきを持っていって、ある指定された場所で交換する。特製のアルバムが別にあり、絵はがきが収まるようになっている。第二回の場合は、大阪貯蓄銀行の南支店が会場。ここは、柳屋があった八幡筋の心斎橋の角。会員証をつくり、「宝葉会ニュース」を発行している。そのなかで活躍した作家が小川茂麻呂という北野恒富の弟子。案内の絵を描いている（図47）。第五回は日本橋北詰のブラジル館が会場となった。

大阪文化の根底に生きる「趣味人」の精神

大阪文化の根底に、趣味人・趣味家の存在がどう伝わってきているのか。その全貌はまだ明らかではなく、今後も考えていかないとならない重要な課題。

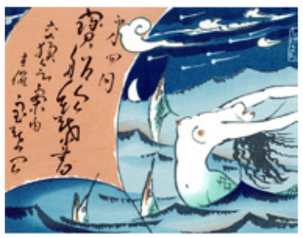
一つは最初に言った、その時代において、稚気、童心という、純粋なものを求めるというかたちをとった。しかし一方で、コレクターの収集に対する執念はものすごく、ただの純粋を求めているとは言えない面もある。また、彩星童人のように、お金持ちなのに金目のものでないものに集中するというように、その根底にあった文化的、精神的なものについても考えないといけないだろう。商売を越えて仲間同士で水平に付き合う楽しみや、いちびり精神などである。

当時、こういう人たちは道頓堀と心斎橋の界隈に集中し、この地に多くの人が渦巻いていた。しかし、今はそんな面影はほとんど残されていない。現在のミナミとは違う世界が、かつては確かにあった。そうしたことの意味を、我々は深く考えていくべきだろう。



45 昭和7（1932）年の「浪華寶船會 寶船授与所畧図」（部分）。心斎橋から道頓堀のあたりに集中している

46「浪華寶船會」頒布加入者一覧（部分）。訪れた先には判が押されている



47 小川茂麻呂が描いた、宝葉会主催の第四回「宝船絵葉書交換会案内」

質疑&持ち寄りトーク

会場から（小谷真功氏） 高津宮の宮司です。当神社では、宝船ではないが、大きな「葦船」を参道の階段に組み上げ、また参拝の方にも縄を結んでもらう、「とこしえ秋まつり」を毎年10月に行っています。この船は芸術家を中心に多くの人たちで共につくる作品でもあり、神社の階段から遙かなる時空へとつながる「とこしえの船」だと思っています。昔の趣味人たちも何かのご縁で集われたように、こうした芸術的なものに思いを寄せて、このお祭りには多くの人が集ってこられます。

橋爪節也氏 高津さんといえば、我々の仲間が「無花果觀櫻會」を毎年春に開催しています。美術を研究している人が主ですが、参加者は自慢の掛け軸を一軸ずつ持ち寄って互いに見せ合うので、それで「いちじく」会（笑）。

会場から（山内英正氏） 私は、今日のお話にも出てきた三宅吉之助の研究・資料収集をしています。彼は、さまざまな趣味の会に加わり、その収集も多岐にわたるものでした。個人的には、東京や横浜のグループともつながりがあり、また大大阪の枠を越えて活動範囲を広げていった。当時、西宮や神戸にも趣味人グループがあり、この方々もやがて大阪のグループと接触していく。阪急や阪神など新しい線路沿いに、趣味人たちがつながっていたことも分かってきました。

そんな彼らも、戦争が激しくなるとだんだん表だった活動が難しくなり、その資料の多くは戦災で失われました。趣味人たちは皆、心豊かで、損得勘定や地位や名誉のためではないのは確か。戦争中でも活動を続けていこうとしました。

会場から（佐藤 隆 氏） 私は大阪市教育委員会で文化財の担当をしています。「上町台地 今昔タイムズ」第7号に、大阪市内で発掘されている土人形の写真が出ていますが、これは瓦屋町1丁目で発掘されたもの。ここは、江戸城にも瓦を納めた寺島家の屋敷があった場所で、主に瓦生産をしていたが、土人形もつくっており、他には金属加工やベンガラづくり、陶器製作もしていた。つまり多業種を集めたようなところです。素焼きの人形にかける釉薬には、鉛や緑青、鉄など、金属加工の副産物を利用した。ベンガラは酸化鉄の加工品。また、人形に使う型などの技法を陶器づくりでも応用した。商いの都市という印象が強い大阪ですが、実際は手工業生産がいろいろなところで行われていました。

しかも18世紀の後半、江戸時代半ば以降に、その関連の出土物が飛躍的に増えてくる。錦絵の技術もそのあたりに出てくるということで、この時期に生活の質がかなり上がってきた。社会に余裕が生まれて趣味の下地ができたように思われます。

会場から（長山公一氏） 私は『大阪春秋』の編集をしており、弊誌でも何年か前に郷土玩具の特集を組みました。ただ、郷土研究雑誌『上方』で、同じ特集が二号に渡ってすでにあり、その充実した内容を越えることが、なかなか難しかったというのが編集後の実感です。むしろ今日お話を聞いていて、「趣味人」の視点を交えながらなら、もう一度特集を組むことができそうだと思いました。

橋爪節也氏 『大阪春秋』で「趣味人」の特集をするなら、三宅吉之助の原稿を山内先生に書いていただき、いろいろな付録も付けるというのはどうですか（笑）。

「趣味人」には、なれる人となれない人がいる。また、ときにはミイラ取りがミイラになる感じもある（笑）。私も、こういうことを研究しようとすると自分で集めないといけなくなるが、家中がこんなのでいっぱいになり、結局怒られることになる（笑）。思うのは、当時の人が真剣にやっていたことの、その本当の意味をちゃんと見直していきたいということです。

山内英正氏（兵庫歴史教育者協議会会長）より、三宅吉之助関連の資料をご紹介いただきました

山内英正氏 三宅吉之助は考古遺物にも関心をもち、御堂筋の地下鉄工事の現場から土器片の採集もしています。私が勤務していた学校の図書館に三宅が収集した考古遺物が眠っており、私は以前、それを大阪市文化財協会の黒田慶一氏とともに、考古資料目録の「瓦編」と「土器編」にまとめました。

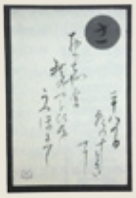
大阪西区の靱に住んでおり、「宇津保文庫」を称した三宅は、「面茶会」など多くの会に参加しました。旦水や紫翠に人魚洞などと、お馴染みの人たちの寄せ書きのはがきも残されています。三宅は申年生まれだったこともあり、猿の顔を自分の似顔絵として、いろんなところで使っています。また、彼は竹下夢二のパトロンでもあり、蔵書票にも夢二のものがあります。もちろん、宝船、絵はがき、しおりもやっており、メンバー間でしおりの交換会もしていました。

三宅吉之助（1884～1943年）

猿の似顔絵

寄せ書きはがき

旧「宇津保文庫」考古資料目録「土器編」



面茶会の例会案内

三宅の千社札

資料提供：山内英正氏